

輸入状況など発表

農研機構北海道農業研究センター

第5回カボチャ研究会開く

農研機構北海道農業研究センター主催の第5回カボチャ研究会は3月1日、オンライン形式（Microsoft Teams を利用したウェブ会議）で開かれた。安東郁男同センター所長は「カボチャ研究会も回を重ねて第5回。オンライン上に3000人近い参加をいただいた。今回はカボチャの品種開発と生産、輸出などの研究について発表（話題提供）していた」と開会に当たってあいさつした。発表の内容を順に紹介しよう。

最初の発表者は、朝日アグリア株式会社種苗開発部の辻あづみさんで

NZ、メキシコ主流

日本に輸入されるカボチャは、ニュージーランド産とメキシコ産がほぼ半々を占めている。韓国、ロシア、トンガ、中国、アメリカ、ニューカレドニアなどからの輸入もあるが、ニュージーランドとメキシコからの輸入が断然多い。

ニュージーランドには北島と南島があるが、北島がカボチャの主要な産地で作付面積は6500ha程と、全農地面積の80%を占める。2000年



ニュージーランドの圃場

頃の栽培農家戸数は245戸ほどだったが、2020年には25戸へと減少した。しかし栽培面積は減ってはいない。生産から流通まで垂直統合されたシステムとなっている。播種は9〜11月播種で収穫は1〜5月となって

いる。現地は太陽の発する紫外線が強いので密植栽培によって、収量をカバーしている。10a当たり苗1000本が植え込まれている。柵目状に整然と植えられている。日本への輸出は減少気味で、その分韓国、中国への輸出が、このところ伸びている。

種子は直播きする

メキシコのカボチャ栽培の中心地はソノラ州で全体の約75%を占めてい

る。シナロア州、ナヤリット州、ハリスコ州などでも栽培されている。ソノラ州の場合、春栽培と夏栽培の2期作が行われている。春栽培の場

合は3月播種の7月収穫、夏栽培の場合は9月播種の12〜1月収穫。最近では1月に播種して4〜6月出荷の作型もあり、栽培面積は増えている。

マルチに穴を空けて種子を直播きし、手をかけて栽培している。播種は9月、収穫は11月〜12月手で行われる。10a当たり苗1000本のやはり密植栽培である。韓国でも栽培が行われているが、健康ブームもあって、2000年以降、ニュージーランド産カボチャが輸入されている。中国では、日本からカボチャを輸入してもいる。ミニカボチャも人気を呼んでいる。

中国で種子を生産

最後に朝日アグリアの事業について触れると、現在種子生産は、中国で行っている。現地は標高2000mの高地である。高品質種子の生産に万全を期し、種子を採るカボチャの果実は、直接耕土に触れないようにして栽培している。

ニュージーランドの生産戸数と戸当たりの作付面積の推移

